



【第二回 (2015年2月23日)】

ランバスの後24年間院長をつとめた吉岡美國

— 信仰、教会・学校行政、教育者 —

井上 琢智

関西学院大学経済学部教授・前学長



アルマン・デメストラルさん（ベーツ院長ご令孫）所蔵

ご紹介いただきました井上です。既に経済学部での最終講義はさせていただきましたけれども、最終の講話をさせていただくこと、改めて感謝申し上げたいと思います。

今日お話しするのは、『学院史紀要』に書かせていただいた、「吉岡美国と敬神愛人」の(1)から(6)までを資料的には基礎にしております。これは伝記的資料の側面が非常に強いものですから、これからどのような吉岡先生像を描くかは、それぞれの読み手の自由だと思っています。私もこれまで、3度にわたって、吉岡先生のことをお話ししたことがあります。今日が4回目でおそらく最終になるということで、資料としては同じものを使っていますが、もう少し包括的な話、とは言いながら、伝記を詳細にお話ししても、おそらくあまり皆さんに興味をお持ちいただけないと思いますので、副タイトルに書きましたように、吉岡先生の「信仰、教会・学校行政、教育者」に焦点をあてて、お話しできればと思っています。

私自身は、先ほどお話しいただきましたように、吉岡先生に興味を持ちましたのは、日本の近代化研究の過程で、吉岡先生と西洋との出会いに何が起こったのかということでした。吉岡先生がキリスト教徒、クリスチャンになられる過程には、いろいろなことがあったと思いますが、先生のキリスト教との出会いを、まずお話ししたいと思っています。メソヂストに出会い、メソヂストのさまざまな方との出会いだけでなく、日本におけるキリスト教諸派の方との出会いや、出来れば吉岡先生の日本のキリスト教界でのお働きについて、当初お話しできればと思っていたのですが、難しいと思い諦めまして、今日はメソヂスト教界に限定してお話しさせていただきます。

1. 「お気の毒トリオ」

最初にお話ししたいのは、このパネルに関わっています。これは125周年記念として開館された博物館で作っていただいたものですが、今日は学院史編纂室の池田さんから「これを展示しては？」というアドバイスをいただきましたので、借りてきたものです。私も背はあまり高くありませんが、私のほうがちょっと大きいかなと。そんなことを自慢しても仕方がないのですが、また、前頁の写真を見ていただきたいのですが、ちょっとわかりにくいとは思いますが、3人の写真の上に、1922年と書いてあり、その上に「お気の毒トリオ」と書いてあります。たぶんこれは、ベーツ先生が書かれたのだと思います。この資料も池田さんから提供を受けました。レジュメにも書いておりますように、この資料は関西学院にしばしば来ていただいておりますマギル大学のアルマン・デメストラル先生（ベーツ院長ご令孫）が所蔵されていたものを関西学院に頂戴したものです。この吉岡先生、ニュートン先生、ベーツ先生の3人がなぜ1922年時点で、「お気の毒」なのかということをお最初に考えてみたいと思っています。

先ほどご紹介がありましたように、ニュートン先生が第3代院長で、吉岡先生が第2代院長、そしてベーツ先生が第4代院長です。20年にベーツ先生が第4代院長になっておられまして、そのとき、ニュートン先生が62歳でしたが、健康の理由があつてニュートン先生が辞められることとなり、ベーツ先生が就任されました。翌21年、高等学部が文学部と高等商業学部とに分かれ、22年には中央講堂と文学部校舎が建てられるなど関西学院は発展を続けていました。

他方、「関関同立」と言われるなかで、1920年に同志社が、22年には立命館、関西大学が大学令によって大学に昇格するなか、関西学院だけがなかなか大学に昇格できませんでした。そのような中で、ベーツ先生たちが努力され、1929年に上ヶ原へ移転し、1932年に大学設立が認可されるわけですが、このようなご努力をされた先生方を「お気の毒」だとしたので

はないでしょうか。つまり、今日の関西学院の大学としての発展の礎をまさに築こうと苦闘されたのが20年代だろうと思います。

2. メソヂスト系学校と日本人宣教師

レジュメに戻りたいと思います。関西学院ができる前に、どのようなメソヂスト系の学校があったかということをはっきりしながら、関西学院の位置づけに簡単に触れたいと思います。それによって吉岡先生のメソヂスト教界におけるお働きが明らかになるのではないかと私は考えています。

ご承知のように、メソヂストは、まず関東、東北で宣教し、次いで九州へ飛びます。そして残っていた宣教地である関西にランバス先生たちが来られ、関西学院の歴史が始まりました。確かに神戸という地が、国際貿易港になりつつあり、東海道本線が神戸まで開通するなど、好条件に加えて、東京、東北、九州に比べると、その地が非常に宣教師にとって住みやすい良い場所でもありました。このような宣教地としての客観的な好条件のなかで神戸、瀬戸内伝道が始まります。ただし、宣教の順序が、アメリカ監督教会、カナダ・メソヂスト教会に続く三番手でした。そのために、その後の日本メソヂストの諸活動の中では吉岡先生は必ずしも十分なコミットをされなかったのではないかと思います。ただ、それだけだったのであろうかと考えています。私自身は、吉岡先生がもっと日本のメソヂスト教界の中で、明治期に、さらに長生きされましたから、大正ぐらいまでは、大きなリーダーシップをとって、監督になられてもいい人ではなかったかと思うのですが、そのような役割はほとんど果たされておられません。結論的になりますが、南メソヂストの代表にはなられますが、日本のメソヂスト教界全体の中で大きな役割を果たされませんでした。それだけではありません。実はこれからお話しするように、吉岡先生は何度か院長辞任の意向を示されておられます。それがなぜだったのかということも、お話しできればと思っています。

レジュメにありますように、多くは青山系の学校が最初に創立され、次いで活水が九州で、そして、その間に聖和短期大学の源流である女子伝道学校が創立されます。さらに鎮西が九州で創立されます。この一覧表を順次見ていただきますと、次いで、函館へ行き、東京に戻り、さらにまた福岡へ行き、やっとならば、9番目に広島女学院が、関西学院よりも早く広島英和女学校として創立されています。この学校が、いわゆる南メソヂストが学校教育に手をつけた最初です。もちろん、宣教開始がメソヂスト教界の中で最後でしたので、先ほど申しましたように、学校教育もまた一番遅くなったことは、当然のことでした。具体的に学校名を揚げますと、東京の女子小学校（1874）、耕教女学校（1878）、東洋英和女学校（1884）、神戸の女子伝道学校（1880：聖和女子学院の前身）、パルモア英学校（1886）、長崎の活水女学校（1879）、カブリー英和学校（1881：鎮西学院の前身）、函館のカロライン・ライト・メモリアル女学校（1882：遺愛学院）、福岡の福岡英和女学校（1885）、広島の広島英和女学校（1886）、弘前の来徳女学校（1886：弘前学院の前身）、静岡の静岡英和女学校（1887）、名古屋の名古屋英和女学校（1887）と続き、山梨英和女学校（1889）と同年関西学院が創立されました。ところでこのような学校を担った人びとはどのような人びとであったかを考えてみたいと思います。これも、ご承知のことだと思いますので、私に関心を持っている人だけをお話したいと思っています。

1) 江原素六

最初の人が江原素六です。この方は、レジユメにありますように、幕末に大きな役割を果たした静岡の沼津兵学校の創立に関わりましたが、同校が閉校になったときに、^{しずはた}賤機社を創立しました。創立に協力したのはD. マクドナルドという人で、有名なお雇い外国人で、同時に医者でした。ところで、江原は東洋英和学校の監事を務めたこと（1889）がありましたが、その学校内に尋常中学部が設立され、同年私立麻布尋常中学校となりました。ただ、後にもう一度触れることになると思いますが、1899年の訓令12号公布によりこの麻布は実は非常に厳しい経営状態に陥りました。その際に、この江原が招聘され、文部省と交渉し、なんとかキリスト教主義学校として立て直そうとしましたが、立て直すことができず、キリスト教主義学校としての役割を終えることになりました。

2) 本多庸一^{よういつ}

次いで、メソヂスト教界の中で大きな役割を果たした本多庸一に触れたいと思います。この方は、横浜バンドのお一人でレジユメにあります弘前の東奥義塾、弘前学院などに関わりながら、次いで青山学院の前身の東京英和学校の校主兼教授（1887）となり、88年にドルー神学校に学んで帰国してのち、校長を務めました。1903年には日本基督教青年同盟の初代の委員長になりましたし、三派合同に際して（1907）、初代の監督になります。この監督選挙で得た票は、アメリカ監督教会の本多が42票、同教会の小方仙之助が5票、カナダ・メソヂストの平岩が2票で、吉岡先生はわずか1票でした。

3) 平岩愼保^{のぶやす}

それから、もう一人、平岩愼保を紹介したいと思います。平岩は中村正直の同人社で学びました。ご承知のように、中村正直は、ベストセラーとなったサミュエル・スマイルズの *Self-Help* を『西国立志篇』『自助論』として翻訳・出版しました。明治期に100万部売れた大ベストセラーで、明治期のいわゆる中級の武士階級、つまり上級・下級の武士ではなく中級の武士や上流の商人階級の人びとが「自助・独立」によって資本主義の担い手になることを説いた本です。この人は産業革命の発祥の地スコットランドのエディンバラ出身です。この原典はイギリスでもたくさん売れました。というのは、イギリスのヴィクトリア時代の担い手はまさにこの中産階級であり、その宗教は主としてユニテリアンなのです。このことが、どのような意味を持つかは経済史や経済思想史の問題であり、それに私自身強い関心をもってきました。とりわけ、ユニテリアンが日本で果たした役割がずっと気になっています。例えば、一時期ユニテリアンに強い関心を抱いた福沢諭吉が『学問ノスゝメ』五編で「ミッツルカラッス」の重要性を説いたこととも関わって興味深い課題だと思っています。

4) 中村正直

ところで、なぜここで中村正直を取り上げたかという、「敬神愛人」という言葉を吉岡先生が非常に重んじられたことと関わります。もっとも、中村正直は彼よりも前に「敬天愛人」という類似した言葉を重んじられましたが、吉岡先生は「天」でなく「神」を使われました。「神」と「天」をどう使い分けるかということは非常に大きな問題であり、そのことが今日最後の方でお話をするテーマになります。この時代の人びとには儒教や仏教の影響がより強く残っていますから、これまで自分が持っていた思想信条・宗教から離れて、キリスト教に関心を持ち、

信仰をもつようになるかという、大きな課題をこれらの人びともまた背負っていたわけです。

5) 佐藤昌介

このレジュメで佐藤昌介が出てきます。この人は、広島、札幌バンドで、M.C. ハリスより洗礼受けました。注目をしていただきたいのは、現在学院史編纂室が所蔵しております、旧制の中学部の講堂に掲げてあった「敬神愛人」という大きな額の字をこの佐藤が揮毫したということです。最初、この言葉をなぜ佐藤昌介が揮毫し、本学が所蔵するようになったか分かりませんでした。揮毫した当時、彼は北海道帝国大学総長でした。どのようなルートで佐藤が揮毫するようになったかという、1929年に田中義弘先生から杉原成義という名古屋中央メソヂスト教会の会員に仲介依頼がなされ、佐藤昌介がそれに応えたということが分かりました。佐藤は、札幌バンドが独立した後もメソヂストの信仰を持ち続けました。ご承知のように佐藤は自然科学者として大きな役割を果たし、札幌農学校教授、同校校長、東北大学農科大学学長をへて、北海道帝国大学初代総長を務めました。1918年のことでした。

6) 内村鑑三

次に内村鑑三についてお話したいと思います。内村はよくご承知のように、不敬事件で大変有名になります。最近、228件の不敬事件ばかりを集めた小股憲明『明治期における不敬事件の研究』(2010)という研究書が出ました。今まで不敬事件といえば内村鑑三のそれだけが突出していますけれども、この本で内村の不敬事件の特色等が分かるようになればありがたいと思っています。内村はいろいろな学校で教師を勤めています。留学から帰国後、北越学館教頭や東洋英和学校をへて、第一高等中学校の教員を勤めます。そこで不敬事件を起こしました。退職後に大阪の泰西学館に勤めます。この学校は今ではほとんど知られてはいませんが、同志社出身の宮川経輝^{つねてる}が創立しました。宮川は同志社でD. W. ラーネッドから経済学を学び、その翻訳も出版しています。この泰西学館は当初キリスト教主義学校でしたが、経営不振や台風により建物が潰れタイピング学校になり、さらに現在の大阪商業大学に属しましたが、最終的に廃校になっています。資料等があったようですが、残念ながら火事で全部焼けました。この学校の出身者としては三好達治などがおり、英語を勉強するのであれば、泰西学館といわれるほど非常に有名な学校でした。

3. 吉岡美國と関西学院の創立

1) 受洗前の吉岡先生

このようなメソヂスト系のキリスト教主義学校の誕生・発展の過程で、1862年生まれ吉岡先生が登場します。

吉岡先生の生家は、今の京都府庁の前の今葉屋町七番にありました。旧土地台帳を調べてみますと、彼がそれをいつ手放し、また買い戻したかが分かりますし、時期から推測すると、手放したのは関西学院の財政的危機を救うためだったということも分かります。家だけでなく家宝までも手放しています。余談ですが、京都府庁の正門を入られると、左手の木々の中に京都慶應義塾があったことを示す碑が立てられており、大阪だけでなく、京都にも短期間ですが慶應義塾の分校があったことが分かります。京都府庁に行かれる機会があれば、一度お訪ねいただきたいと思っています。

9歳の吉岡先生は欧学舎の支舎「英学校」とその欧学舎と併合された立生校で皇学・漢学を学び、他方、京都中学校に付置された小学舎でも学ばれました。従って先生は洛北高等学校の第1期生とされています。学校は現在のザ・リッツカールトンの地にありました。その中でも一番大きな影響を受けたのは欧学舎で、その教師の一人は日本で英語教育に従事されたC. ボールドウィンでした。彼はアメリカのボストン生まれでした。吉岡先生は英語を上手に話されたようですが、先生の英語は、キングス・イングリッシュではなくて、アメリカン・イングリッシュだったと思われますが、吉岡先生の英語のテープが残っていればどこの訛りかわかるのでしょうか、残念ながら残されていないようです。ボールドウィンは南北戦争に参加した後、1869年に来日し、神戸のレーマン・ハルトマン商会に勤めましたが、欧学舎にお雇い教師として採用されています。1871年、明治4年のことです。このボールドウィンから教わった人の中には言語学者平井金三、東京高商、東京外大で教えた浅田栄次、さらに、吉岡先生のほかに、関西学院関係では、芦田慶治先生がおられます。芦田先生は関西学院で教鞭をとられた後、同志社に移られてしまいます。なぜ、芦田先生が同志社に移られたかということは、今でも明確な答えは出てきません。関西学院は多少保守的なところがあり、ということは悪い意味だけではありませんが、アメリカの自由主義的神学を学んだ芦田先生は合わず、同志社に移られたという解釈もあります。しかし、現職時代の芦田先生は中学部の拡大等にも尽力された先生であり、吉岡先生の後輩として大きなお働きをされたと思います。

吉岡先生は非常によい成績だったようです。先生は工部寮、後に工部大学校と改称されていますが、東京大学工学部の前身の学校への進学を希望されたようです。しかし、家庭の事情で諦め、京都府中学校の助教諭として勤務されました。ただ、その期間が非常に長く1879年から85年までです。この間に何があったかということをお簡単に触れたいと思います。

2) 福沢諭吉とユニテリアン

ところで、1881年9月の『時事小言』で福沢諭吉のキリスト教批判は頂点に達しました。それに対応するかのようになり、その年の6月、京都四條の金蓮寺で慶應義塾の交詢社社員の学術講演会が行なわれ、耶蘇教を駁して信徒を罵倒・非難しました。この講演に対し本願寺が多額のお金を払うということが起こりました。このような講演会は4回も開かれましたが、その第1回の演説会では、鎌田栄吉が話しています。鎌田はのちに慶應義塾の塾長となり、歴代の塾長の中で一番長く務めた人です。ところが、このような福沢がのちにキリスト教に強い関心をもつようになりました。この事情を詳細に明らかにしたのが白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち—知られざる明治期の日英関係—』(1999)です。結論から言いますと、福沢自身は正統的とされるキリスト教には必ずしも同意をしなかったけれど、きわめて合理的だと考えられたユニテリアンに強い関心を持つようになりました。とりわけ、三位一体論つまり「父・子・精霊」の一体論を否定したユニテリアンに関心をもちました。例えば、ジョン・ステュアート・ミルやベンサムもユニテリアンだとされています。これらユニテリアンがヴィクトリア中産階級の信仰であり、人間の「完全可能性」を信じ、イギリスのいわゆる産業革命後の発展を支えたとされています。

3) 吉岡先生とキリスト教との出会い

仏教によるこのようなキリスト教批判の演説を、吉岡先生も聞かれた可能性もあります。お母さんは日蓮宗の熱心な信者でしたが、吉岡先生は仏教がいかに味気ないもので化石化したも

のだと考えるようになり、仏教の代替物を求めるようになりました。ですから、吉岡先生はヨーロッパの宗教であるキリスト教がその文化を支えていると理解され、キリスト教を文献的に調べられました。「調査した」と書かれています。つまり、教会に通い、牧師から直接話を聞く前に、いろいろな文献を調査しました。その中の一つが中村正直訓点の『天道遡原』です。W.A.P. マーティンの『天道遡原』の訓点版であり、吉岡先生の蔵書の中にその1880年版があります。この蔵書は手沢本とはなっておらず、メモも書かれていないようです。この『天道遡原』を中村はユニテリアンの立場で理解しています。『ゆにてりあん』という雑誌ができたときにも、この中村正直はその第1号に投稿していますし、福沢諭吉もそれに投稿しています。このような「調査」を通じて、吉岡先生は経験・体験を通じてではなく、まず思想的にアプローチしたように思います。そのような研究者のような姿勢を越えて、吉岡先生がどのように信仰に至られたかということは、私にとって非常に大きな興味ある課題です。知識・思想としてキリスト教を学ぶことと、信仰を持つことにはものすごく大きなギャップがあるのではないかと思います。

W.E. タウソンの“Yoshioka Yoshikuni”でも、当時吉岡先生は「西洋各国ノ宗教ノ事情ヲ研究セント」されていたと書かれているように、あくまで「研究」であって、「信仰」から入ったとは書かれていません。というのは「無味乾燥で命の輝きのない抜け殻のような仏教に、若き吉岡の探求心は満たされなかった」からであったとも書かれています。それを満たしたのが、心理学者のA. ベイン、スペンサー、ダーウィンのような進化論者の著書でした。ただ、進化論は反キリスト教的な要素を持ちますので、なぜタウソンが吉岡先生はこれら進化思想を仏教よりも「納得」しえたと書いたかは理解できません。

例えば、進化論が明治10年代にキリスト教批判の道具とされたことがあります。1877年6月、大森貝塚を発見することになるモースが来日し、請われて東京大学の教師になりました。進化論者モースが招聘されたのは「動物学生理学教授」就任でしたが、もう一つの役割がありました。それがキリスト教批判の担い手としての役割でした。モースが帰国した1880年2月新島襄は「およそ七百人ほどの学生を有する官立の東京大学には反キリスト教的雰囲気があります。何人かの日本人および外国人教師が悪影響を及ぼしています」と書きましたが、その外国人教師の一人がモースでした。他方、同じ年の6月東京青年会が創立されていますし、東京では、中央教会（現、本郷中央教会）が1883年に、甲府で伝道していたカナダ・メソジストのC.S. イービーによって、超教派的立場にたって設立されました。のちにベーツ先生が主任宣教師となりました。この教会に属されたのは、曾木銀次郎先生であり、ベーツ先生が関西学院に招かれることとなった小山東助、佐藤清、河上丈太郎、新明正道各先生は、ご承知の通り、関西学院の学問的レベルを高めるなど大きく貢献されました。他方、最初の学生YMCAも1888年に帝国大学内に創立されました。

ところで、このような苦悩は、助教論時代だけでなく、ボールドウィンの紹介で神戸の兵庫ニュース社勤務時代まで続きました。その兵庫ニュース社時代に、先生を訪ねてきた人から老ランバス先生を紹介されたようです。その人は、キリスト者ではなかったようです。この老ランバス先生との出会いにより、吉岡先生は「老ランバスハ基督教ノ権化ナリ」と感じられ、キリスト教のことを老ランバス先生から学ぶようになり、受洗されるようになりました。それが一つの契機となり、知識・思想研究の対象としてのキリスト教から、キリスト者としての歩みが始まります。老ランバス先生を「キリスト教ノ権化ナリ」と感じたという、まさに経験・体験を通じて信仰を持つようになられたのではないのでしょうか。次ぎにこのような体験・経験を通じ

て信仰を持たれるようになられたのが、おそらくは大分でのリバイバルだっただろうと思います。

4) 関西学院と慶應義塾

レジュメには、次ぎに教育機関としての関西学院の歴史を書いています。関西学院が学校を創立し授業を開始した(1889)1年後、慶應義塾はユニテリアンを招聘し、大学部を設置しようとしていました。三位一体論・原罪を否定するユニテリアリズムの合理主義が、迷信や門閥制度を排し、実学(science)の重要性を説く福沢に合ったのだらうと思います。ただ、福沢は後年再び仏教に帰依するようになりますから、福沢の一時的な、ある意味では迷いであったかもしれませんが、福沢がユニテリアンに深く係わり、慶應義塾をキリスト教主義学校にしても良いとまで発言したことがあったことは、是非お知りおきいただきたいと思っています。

ここで、この慶應義塾に関わるエピソードをもう一つ挟みたいと思います。この大分リバイバルはS.H. ウエンライト先生の大分教会で起こりましたが、そのウエンライト先生を誰が招聘したかということです。1881年京都で仏教を強く排斥する演説をした一人が鎌田栄吉であったことはお話しいたしました。当時、慶應義塾は、その学風を日本中に広めるために、義塾の学生や若い先生を地方の要請に応じて派遣しました。このような方法で慶應義塾はどんどん日本中に広まっていきます。いわゆる出前授業のはしりです。鎌田もまた大分中学校校長(1886)や県の教育委員会で働きました。鎌田自身も外国人による英語の教育の必要性を考えていました。慶應義塾では、1872年にアメリカ長老派の宣教師C. カロザースを最初の外国人教師として迎えた経験もあったからだと思います。鎌田は、慶應義塾教員でメソヂストであったW.C. キッチン(Kitchin)を通じて、彼の従兄弟で南宣教部のJ.C. デビットソン(Davidson)を介して、若ランバス先生に伝わり、若ランバス先生が*The Missionary Reporter*に教員公募の広告を出されました。それに応募したのがウエンライト先生だということです。ウエンライト先生は、学生さんに非常に慕われ、いったん帰国された後も学生がまた戻って欲しいという要請文を出すなどの運動をしました。でも、結局実現しませんでした。もっともご承知の通り、再来日され、ウエンライト先生は銀座の今の教文館で大きな役割を果たされました。

関西学院が創立された1889年に明治憲法が公布されましたが、翌年には、教育勅語が公布されます。ご承知のように、教育勅語の草稿の一つに「徳育大意」があります。中村正直が書いた草案です。これについては梅溪昇『教育勅語成立史：天皇制国家観の成立 下』の中にも詳しく書かれています。教育勅語には宗教色を除くことが求められていましたが、中村は「敬天敬神」こそが教育の根元であり、「個人の完成」を求めて、草案を書きましたが、「教育勅語では敬天・尊神の語を避けなければならない」という井上毅の批判により葬り去られました。ただ、吉岡先生^{ゆんちほ}の思想を考えるに場合、中村正直の思想と比較検討する必要があるのではないかと思います。

5) 吉岡先生と尹致昊—ヴァンダービルト大学留学時代—

1890年、吉岡先生はヴァンダービルト大学に留学されます。ヴァンダービルト大学を卒業したり、留学した関西学院関係者は案外多いですね。初期には、O.A. デュークス先生、若ランバス先生、V.B. モズレー先生、そしてT.H. ヘーデン先生、普通学部の拡張に貢献し、認定・指定に際して大きな役割を果たされたS.E. ヘーガー先生もヴァンダービルトですね。また、西川玉之助、芦田慶治、鶴崎庚午郎などの先生などもこの大学に留学しておられます。

吉岡先生は1890年8月に渡米され、ヴァンダービルト大学を92年に卒業し帰国されます。

留学中の詳細については吉岡先生は何も書かれていません。ただ、同時期にヴァンダービルト大学に留学していた尹致昊が残した『尹致昊日記』があり、それを研究された論文に木下隆男先生が書かれた「関西学院と『尹致昊日記』」があります。非常に優れた実証性の高い論文です。この『日記』は朝鮮語と英語で書かれていますが、留学中のところは英語で書かれていますので、それを資料として吉岡先生のキリスト教観をご紹介したいと思います。

尹は、1881年宮廷派遣の留学生の一人として、日本へ留学し、他の二人が慶應義塾に入学したのに対してユニテリアンである中村の同人舎に入学しましたし、いったん帰国後、再び上海の南メソヂスト系の中西書院へ留学し、そこで老ランバス先生と会われています。その関係でヴァンダービルト大学へ留学しました。そのヴァンダービルト大学で、最初に吉岡先生と出会ったとき、尹は先生のことを「彼はひじょうにすばらしい仲間であり、ひじょうに上手に英語を話す」と書きました。その吉岡先生は「日本のキリスト教徒は、アメリカの兄弟たちがもつ…無関心、反目、中傷といった欠陥の犠牲になっている」として、アメリカのキリスト教徒たちを批判したと書いています。さらに、吉岡先生は、彼らの生来の誘惑の危険とか純粋な道徳の弱さ、墮落について話をしたとも書いています。また、吉岡先生は尹に「あなたは政治家になる運命であり、伝道者になる運命ではない」と語ったのに対して、伝道者になろうと思っていた尹は困ったようです。実際、尹は伝道者となりましたし、朝鮮で最初のメソヂストの受洗を受けましたが、吉岡先生の指摘のように、尹は外交官、外務大臣代理など政治家の道を歩み、百五人事件(1910-11)で逮捕され、有罪になっています。さらに、吉岡先生はアメリカ人の説教に対し過激なほど批判的な精神を持っており、教会の靈的状况を示す尺度である祈祷会への出席者が少ないことに失望していると、尹は書いています。これは老ランバスとの出会い、大分のリバイバルの経験・体験や祈祷会の役割など、靈的出会いを重視する吉岡先生の姿勢を表しているのではないのでしょうか。

さらに重要なことは、吉岡先生がウェスレー派や初期のメソヂストの日常生活の実践がドグマ化し、化石化し、生気がなくなっていると明確に批判していたということです。加えて、尹と三位一体論を議論した際、尹は、自分はユニテリアンよりもトリニタリアンを支持していると言ったのに対して、吉岡先生は意見を述べなかつたとも書いています。また、吉岡先生は尹に対して「神への愛をもっておれば、どこでも喜んで仕事ができる。さもなければ、あなたは牧師として失敗する」と語ったのに対して、尹は感謝をしています。また「必要であれば、自分の利益を犠牲にして、ただ純粋にキリストのために宣教活動するものこそ、真に神に召される」と語り、尹も同意しています。ただ、吉岡先生が「そもそも伝道というものは、仕事ではないのだ。職業として伝道活動に入るものは正しくない」と言ったのに対して、尹は反対し「職業としての伝道は、キリスト教の歴史を考えると、あった」と反論しています。もっともこれらの理解は吉岡先生の言葉ではなく、尹の記述にもとづいたものですので、厳密な分析とはいえないと思いますが、吉岡先生が書かれた原資料がありませんので、多少限定が必要かと思えます。

4. 吉岡美國院長と認定・指定問題

留学から帰国した翌年の1892年6月、吉岡先生は院長心得に就任します。ここからいよいよ、2つ目のテーマに入ることになります。それは、先ほど申しましたように、前回のご報告で田淵結さんも触れられた、初等・中等教育から宗教色を払拭する、よく言えば、教育の宗教から

の独立を、政府が認定・指定という政策を通じて一方的に押し付けたということです。

この問題に直面する前の 92 年 7 月、関西学院は憲法を改正し、南メソヂストの 4 名の宣教師と日本人 4 名で評議会を構成し、運営することになりました。関西学院運営の歴史は、理事会制になり、評議会制、さらに理事会制へと変遷しています。その年の 9 月に院長に就任され、翌 93 年 9 月には院主にも就任されています。この少し前の 91 年、自分の京都の家を処分され一時期買い戻しをされましたが、関西学院社団が設立され、原田の森キャンパスを購入した翌年の 1911 年に最終的に手放されています。

1) 教育勅語と文部省訓令第 12 号

ところで、教育における宗教の役割に決定的な影響を与えたのが、1890 年の教育勅語、99 年の私立学校令と文部省訓令第 12 号であり、さらに兵役免除に関わる徴兵令第 13 号による「認定」、専門学校入学者検定規程第 8 条による「指定」でした。この問題は現在、文部科学省が初等・中等教育に道徳教育を本格的に導入しようとしていることを考えると、現代的な課題となりつつあることに私たちは十分留意しておく必要があります。つまり、すでに、前回の田淵さんのお話しにもありました「聖書と礼拝なくして関学なし」、正確には「特典便宜何者ぞ。全生徒を失ふとも亦止むを得ざるなり」ですが、この「一大声明」を出さざるを得なかった吉岡先生が担われる課題でした。

実はこのような教育への政治的関与には布石がありました。1894 年の「教員の政治関与の禁止の訓令」です。官吏によるマスコミでの政治的発言は、1875 年の「新聞紙条例」第 16 条や「明治 8 年太政官達第 119 号」によってすでに禁止されていました。一種の言論統制です。例えば、兵庫県の県令を経験した神田^{たかひら}孝平もまた自分の政治声明や政治信条をいろいろな新聞等に公表できなくなり、思想家としての役割を果たせなくなりました。それと同じように、教員についても、このように政治活動についての制限が設けられました。明治憲法発布にともなう「アメとムチ」の「ムチ」の一例です。

この認定・指定を受けられるかどうかは、私学経営には決定的な影響を与えました。とりわけ、先にお話ししました東洋英和学校内に設置された麻布中学校のように、その対応を誤るとキリスト教主義教育を放棄せざるを得なくなるからです。吉岡先生の「一大声明」にもかかわらず、この問題の解決のための努力は学内で少しずつなされました。例えば、1902 年には中学校令に準拠するように普通学部学則を改正しています。というのは、普通学部が中学校令に準拠する中学となれば、認定・指定を受けられるからです。さらに 1904 年にブランチ・メモリアル・チャペルが建設されキリスト教主義教育の強化を図りながらも、学内には賛否があったにもかかわらず、1906 年 2 月に「吉岡氏ヨリ認可ヲ受クルニ決シタル談」を發し、6 月には「帽子記章改正」を行ない、学生の増加をも見込んで、1906 年には隣接の松林 5 千坪を購入しました。さらにこの動きを促進したのは、1907 年 9 月の南メソヂストの S.E. ヘーガー先生の普通学部部長の就任でした。ヘーガー先生は、健康を損ねておられた吉岡院長の院長代理として、芦田先生とともに文部省との交渉をされました。さらに、ヘーガー先生は、軍事教練用兵器購入のための資金調達に奔走されたり、修身の授業で聖書教育をされるなどの現実主義者でした。これは先にお話しした今日の課題への一つの解決策かもしれませんね。

2) 関西学院の発展と吉岡先生の苦悩

他方、関西学院を専門学校へと昇格させる努力もされました。専門学校への昇格は、関西学

院が単なる一私塾から脱皮し、教育機関として社会に認知されることを意味したからです。その第一歩は、1908年9月の専門学校関西学院神学校の設置認可でした。それを受けて、吉岡先生は認定・指定の申請書に押印し、提出されました。その結果、1909年2月、神学部本科と普通学部が認定を受け、8月には普通学部が指定を受けることができました。ちょうど関西学院創立20周年を迎えるときでした。

さらに、この問題は普通学部の中学部への名称変更にも影響を与えることになります。普通学部の中学校令に基づく中学校へと昇格させることは、麻布などのように、キリスト教主義教育の放棄を意味することとなります。他方、その名称を普通学部から「中学校」へと変更することで、その社会的認知は広がることは確実にあります。そこで選ばれたのが「中学校」ではなく、「中学部」という名称です。この「部」という名称を使う例は、慶應義塾にもありました。ユニテリアン教師を招聘し、大学教育を実施しようとした慶應義塾は、私立大学設置が認められていなかった1890年に大学部を設置しています。この例に倣ったかどうか分かりませんが、1914年1月、中学部への名称変更を申請しましたが認可されず、10月に再申請をしたところ、15年2月に認可されています。この認可に尽力したのは、普通学部の卒業生で当時早稲田大学教授となっていた永井柳太郎でした。ところで、永井は英国留学しましたが、ユニテリアン団体の支援によるものでしたし、オックスフォード大学に留学したのではなく、オックスフォードにあったマンチェスター・カレッジへの留学でした。この名称変更により中学部の規模が大きくなりましたが、それが吉岡先生を悩ますことになります。

これが吉岡先生の2つ目の悩みとなりました。中学部内では、旧教員と新教員、旧学生と新学生との間に溝が大きくなったということでした。この問題に悩まれた吉岡先生は、その責任と健康を理由に、院長辞職願いを出されます。1915年12月のことでした。理事会はその辞表を受理し、名誉院長に推挙します。教育者としての吉岡先生にとって、関西学院の教育は、やはり先ほどお話ししましたように、小規模の、さらにいえば、霊との出会いができるものでなければなかつたと思います。ですから、中学部として大規模な学校になることについては、おそらく基本的には賛成ではなかつたように思います。しかし、学校行政を考えたときに、やはり賛成せざるを得なくなつたのではないのでしょうか。つまり私立学校としての発展を願うとき、信仰・教育者としての側面は後退せざるを得なくなつたのではないのでしょうか。

5. 吉岡美國と三派合同問題

吉岡先生の3つ目の悩みは、三派合同の問題です。この合同によって、日本のメソヂストは大きな組織になっていきましたが、その過程の中で、誰がリーダーシップをとるかという課題が生まれ、そのことが吉岡先生を悩ませました。すでにお話ししましたように、関西学院の創立は、1886年の南メソヂストによる宣教から始まりました。吉岡先生はアメリカ留学を終えて帰国され、1892年に院長心得になられます。それを支えた評議会はアメリカ南メソヂスト教会の宣教師4名と日本人宣教師4名から構成され、両者のバランスがとられています。関西学院の運営が日本人の手に委ねられる第一歩でした。

他方、アメリカ監督教会、カナダ・メソヂスト教会、アメリカ南メソヂスト教会の三派は、1883年から合同を模索し、1907年、日本メソヂスト教会の設立により三派合同が実現しました。この合同を背景に、1910年5月にカナダ・メソヂスト教会が関西学院の経営に参加するようになり、11月には関西学院社団が設立されました。とはいえ、学内の生徒・学生にとって関

西学院は「米国人の設立して居る学校だけれ共^{ども}…吉岡美國…の作つてゐる大家族」でした。そのような学生の想いにもかかわらず、吉岡先生は理事にさえ選出されませんでした。

三派合同後の1911年3月に開催された三派各4名の12名の理事からなる社団の第1回理事会で、院長にカナダ・メソヂスト教会の江原素六が選出されましたが、辞退されたため、吉岡先生が院長代理に就任しました。ただ、これにはカナダ・メソヂスト教会や日本メソヂスト教会による吉岡降ろしだと感じた同窓は大反対でした。永井柳太郎も吉岡先生を擁護しています。このこともあって悩まれた吉岡先生は合同推進のためとして辞退を明言されています。事実、同年12月開催された第2回理事会で吉岡先生は「学内行政から全面的に辞任したい旨」の書簡を朗読されています。従って、その場で吉岡先生を名誉院長に推挙することすら話題になっています。この第2回理事会でカナダ・メソヂスト教会の平岩愼保が院長に選出されましたが、日本メソヂスト教会監督の本多庸一が死去し、平岩がその後任の監督に選出されたため、平岩は院長に就任できませんでした。これにより院長不在となった関西学院は、1912年4月開催の第4回理事会で満場一致で吉岡先生を院長に選出しました。理事でない院長の誕生という異常事態でした。先生は「自分〔吉岡〕に立て院長たらんことを勧告せられたり、自分は決して其器にあらざるを自覚すれども…神の御意のある所を^{かしこ}畏み、…承諾」されました。先生の^{わずか}「毫も私心を挟まず、全く己を捨て、一意学院の発展の爲めに尽くされたるその公明正大なる態度」ゆえの選出でした。このように吉岡先生は、南メソヂストの代表者にはなられましたが、あくまでも「吉岡美國の関西学院」であり、「関西学院の吉岡美國」としてご活躍しようと思われたのです。そして、すでにお話しいたしましたように、1915年になって、中学部問題と健康を理由に院長を辞任され、関西学院最初の名誉院長に推薦されました。

6. 吉岡美國の信仰

1) 吉岡先生の「神」—「敬天愛人」から「敬神愛人」へ—

最後に、吉岡先生の信仰について再度お話ししたいと思います。吉岡先生とキリスト教との出会いの最初が、老ランバス先生との出会いであり、大分リバイバルでの霊との出会いであり3番目が『天道溯原』との出会いでした。その出会いを通じて、吉岡先生は「天」を「天地」と捉え、「父上」である「神」と区別しています。したがって、「敬う」対象は「天」でなく「神」でなければなりません。さらに、「先ツ有ゆる人間の中で、イエスハ」と語られるとき、吉岡はイエスを人間であると捉えながらも、しかしながら「円満完全にして欠陥なき性格」をもつ点で、「神」であると考えられたのではないのでしょうか。ユニテリアンであった中村正直とは異なり、吉岡先生にとって、イエスはキリスト教信仰上不可欠な存在であり、キリスト者が模範となすべき対象でした。つまり、私の理解では、完全な存在は神でしかないけれど、キリストだけが神としての「完全さ」を有しており、その「完全な」イエスをモデルに「完全可能性」を求めてそのイエスに倣って努力し続けることがまさに、“Mastery for Service”ではありませんが、人間の理想な生き方だと、吉岡先生は考えておられたのではないのでしょうか。もっとも今日では“Mastery for Service”は、「自分のため」だけでなく「人のために」と理解されていますが、吉岡先生はさらにその先に「神のために」とおっしゃっていると思います。それによって、人は「神」に祝福されるようになります。吉岡先生の場合、信仰者として、最後に「人」ではなく、その「人」を越えた「神」があったのです。私はこれまで“Mastery for Service”のことをお話するとき、サービスの対象は社会であり、地球でしたが、吉岡先生

にとっては、その対象は「神」であったということになります。吉岡先生はこのように語っておられます。「偉業を果たそうとするな！・・・日常の瑣末な事柄・・・をまずなせ。自らの持ち場においてなすべき働きをなすこと、自らに与えられた賜物をすべて用いるべきこと・・・これらのことを人間として賛美されんがためではなく神のために為せ！それが偉大な人生を築かせるものとなろう」（『関西文壇』1907年12月号）と。

2) 関西学院の教育理念

このような努力、「より完全な人間にならなければいけない」という、まさに吉岡先生の日頃の努力が、おそらく、副題の最後にあります「教育者」として、多くの生徒・学生さんに慕われたのではないのでしょうか。もちろん、吉岡先生が「完全」になったと自らが思われたことはないと思います。しかし、このような意志を絶えず持ちながら、日々努力されてきたことは事実です。その典型的な例を紹介したいと思います。吉岡先生が院長のときに、4年生が3年生を殴りつけた事件が起きました。このような暴力事件があった場合、全員退学にしなればいけないのですが、吉岡先生は「^{いやしく}苟も教育機関ノ備ハレル学校、殊ニ愛ノ精神ヲ称道シツハアル我学院トシテ許スベカラザル状態・・・院長タル余ノ責任・・・罪ハア余ニアリ。先ヅ余ヨリ罪ニ服シ」と言われ、自ら謹慎、清掃当番をされました。このような日頃の姿勢が、吉岡先生をして教育者として優れたものとさせたのではないのでしょうか。一方で、私立学校としての関西学院の発展を望み、それに賛成しながらも、他方で、信仰、それも霊との出会いを重んじるキリスト教主義教育者として、たえず生徒・学生の教育に邁進されたのではないのでしょうか。だからこそ、内村鑑三は、東京の開成中学校に在籍していた弟順也に関西学院への入学を勧めました。内村鑑三は順也を人として育てるために、吉岡先生に是非預かってもらいたいと願ったということだろうと思います。順也先生はのちに関西学院中学部の英語教師になられています。

最後にお話ししたいのは、吉岡先生は亡くなられたのち、大阪大学で病理解剖のために献体をされています。最後の最後まで、人のために献体をされたということです。吉岡先生にとってそれが「神」に祝福される道とお考えになったのではないのでしょうか。

晩年、吉岡先生は教会というよりも自宅で礼拝をもたれました。吉岡先生は甲東園にお宅がありましたから、お歳をめされたかたはご存知かもしれません。いずれにしても、吉岡先生は、キリスト教の知識取得、ヨーロッパ的思想の研究者に留まることなく、それを超えてキリスト者として信仰をもたれるようになりました。それを実現したのが、「基督教ノ権化」としての老ランバス先生との出会いであり、大分リバイバルでの霊との出会いであり、それらの経験・体験を通じてキリスト者になられたのです。

教会・学校行政の場で、例えば、日本メソヂスト教会の監督などの役職に就くことは、吉岡先生にとって、何ら「神に祝福される」生き方ではなく、教育の現場、それも関西学院という学校の現場で、自らキリストのような「完全な人」となるための努力を続け、生徒・学生にもそのような生き方をするように求めたのではないのでしょうか。そのように思っています。ちょっと時間が過ぎましたが、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。